平成 28 年度　国立大雪青少年交流の家教育事業
「ワイルドライフキャンプ 2016」事業報告書

1　事業実施の背景

都市化、過疎化、少子化などさまざまな要因により、家族の形態も機能も大きく変化してきた。多くの人々が都市部に移動し、核家族を形成するようになり、かつて大家族の中で多くの兄弟姉妹との切磋琢磨の中、自らの生き方を学んだ子供たちは、今や家族の中で必要な社会性を身に付ける機会が少なくなり、家族のきずなも緩められてきている。また、高度情報化等による青少年のコミュニケーション能力の低下や実体験を伴う学びの不足など、子供たちの生きる力を育む自然体験をはじめとした体験活動の機会や場も減少している。

教育基本法第 17 条に基づき平成 25 年６月 14 日に閣議決定された「第 2 期教育振興基本計画」においては、４つの基本的方向性に基づき、その１番目に示されている「社会を生き抜く力」について、社会で生き抜くうえで必要な「自立・協同・創造」に向けた力を身に付けるために様々な体験活動が推進されている。

そこで、かつて子供たちが生き方を学んだ家族や自然体験という学びの場として、当時の兄弟姉妹関係を模した年齢構成（小学校３年生～中学生）で、寝食を共にする長期間の自然・生活体験を実践するプログラムを提供することで「たくましさ（自立）」「互いを認め合う心（協同）」「自然・生活体験（創造）」を育成することができるかを検証した。

2　事業要旨

（１）　北海道の広大な大地と豊かで厳しい自然の中での生活体験や様々な自然体験活動への挑戦をとおして、参加者に「互いを認め合う心」と「たくましさ」を兼ね備えた、次代を担うリーダーを育成することを目的とする。

（２）　「自然体験」や「生活体験」を中心として、参加者の人間形成を目的としたプログラム事業とする。

3　主催

独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大雪青少年交流の家

4　後援

北海道教育委員会　北海道小学校長会　北海道中学校長会　北海道高等学校長協会　上川管内教育委員会連合会　美瑛町　美瑛町教育委員会

5　事業概要

・期日　平成 28 年８月３日（水）～10 日（水）　（７泊８日）
・会場　国立大雪青少年交流の家　及び　その周辺　富良野岳
・対象　全国の小学校３年生～６年生 16 名　中学生４名
・定員　20 名

・講師　上川中部森林管理署　国立大雪青少年交流の家職員

6　目的の達成指標

（１）　参加者の満足度（数値、記述）

7　参加者人員・学年

参加者 20 名（定員比 100％）

内訳：小学３年生３名　小学４年生５名　小学５年生５名　小学６年生５名

中学１年生２名

8　事業日程・内容

（１）日程

						13:30	14:00	16:30	19:00	20:30	21:30
8/3（水）						受付	開会式	生活の場を整える テント張り　仲間つくりゲーム	夕食作り 夕食 片づけ	ミーティング	入浴	就寝
	6:00	6:30	9:00								
8/4（木）	起床	朝食作り 朝食 片づけ	水辺を歩く 不動の滝周辺の川を歩く(3km)						夕食作り 夕食 片づけ	ミーティング	入浴	就寝
8/5（金）	起床	朝食作り 朝食 片づけ	丘を歩く 野鳥の森から模範牧場までの道を歩く(8km)						夕食作り 夕食 片づけ	ミーティング	入浴	就寝
8/6（土）	起床	朝食作り 朝食 片づけ	岩場を歩く 交流の家から望岳台までの原生林コースを歩く(11.8km)						夕食作り 夕食 片づけ	ミーティング	入浴	就寝
	5:30	8:00									
8/7（日）	起床	朝食	山を歩く 富良野岳を登る(標高1912m)						夕食作り 夕食 片づけ	ミーティング	入浴	就寝
							15:00				
8/8（月）	起床	朝食作り 朝食 片づけ	マイ・プラン 自分たちで計画した時間を楽しむ				燻製準備 パーティー計画		夕食作り 夕食 片づけ	ミーティング	入浴	就寝
								17:00	20:00	21:00	22:00
8/9（火）	起床	朝食作り 朝食 片づけ	森を歩く	マイセルフプラン	昼食作り	キャンプ場片付け パーティー準備・燻製作り		さよならパーティー キャンプファイヤー	ミーティング	入浴	就寝
			9:00		12:00	13:00					
8/10（水）	起床	朝食作り 朝食 片づけ	キャンプ地 片づけ	出発式	昼食 (レストラン)	解散					

（２）概要・運営のポイント

班を異年齢で構成し昔の兄弟姉妹の構成を再現するようにした。

事業の前半は富良野岳登山に向けての準備とし、班ごとに歩く練習を重ね、負荷を増していくプログラムを組み、登山に向けて体を慣らしていくと同時に、班毎の連帯感や仲間と協力し取り組む姿勢を身につけていった。富良野岳登山終了後は、班毎のまとまりを活かし、班で１日のプログラムを考えて実践、その後、１人でキャンプをふりかえり、気持

ちの整理をさせ、最後のキャンプファイヤーでそれぞれの思いを確かめ合い、明日からの自分をイメージさせた。

（３）各プログラムの内容

①　「生活の場を整える」

１日目は開校式の後、キャンプ地で仲間づくりのゲームを行い、気持ちをリラックスさせた後、テント班に分かれテントを立てた。協力して行う最初の作業となり、コミュニケーションがとれず、なかなかテントを立てられない班もあったが、先に終わった班の人たちに立て方を聞いたり、手助けしてもらったりして、どの班も自分たちでテントを立てることができた。この段階で、自分たちのことは自分たちでしなくてはならないという意識も持たせることができた。

②　「水辺を歩く（３㎞）」

２日目は不動の滝川を歩くために、スタート地点までの３キロを班毎に列になって歩き、間を開けずに歩く練習をした。スタート地点からはヘルメット、ライフジャケットを着用し、不動の滝までの３キロを川の流れに逆らって登った。水の流れも場所によっては速く、深いところもあり、倒木をよけたり時には水に浮くなどして楽しみながら歩いた。川を歩くと普段とは違う感覚になるためか、自然に歩くことに集中し、前の人の後を追って歩くようになった。また、二ホンザリガニを見つけたり触れたりすることで水辺に生息する生き物にも興味関心を示していた。

③　「丘を歩く（８㎞）」

３日目は丘のまち美瑛の特色を生かしたコースで、野鳥の森から模範牧場、砂防情報センターまでの緩やかな４㎞の登りと広大な牧場を見ながら歩く３㎞のコースを歩いた。前日に水辺を歩いたことで前の人の後をついて歩くことができるようになっており、ここではリーダーを中心に間隔を開けないで歩く順番を考えたり、試したりしながら歩いた。平坦な道では低学年の集中力が切れやすく、リーダーや周りの仲間から励ましの声が聞こえてくるなど、班

毎のまとまりも見られるようになった。7㎞地点となる砂防情報センターで各自バーナーを使い湯を沸かし、昼食を準備した。その後、ボランティアスタッフが準備したゲームで仲間意識も高まり、みんなで楽しく遊ぶことができた。

また、砂防情報センターからは富良野岳が見え、高くそびえる頂上に自分たちが登るんだという大きな目標を感じ取ることができた。

④ 「岩場を歩く（11.8㎞）」

４日目は交流の家から望岳台までの原生林望岳台のハイキングコースを歩いた。ハイキングといっても、軽登山に近いコースで、森林の中を歩いたり、岩場や川を渡ったりと変化に富んだコースでもある。この頃はすっかり班で歩くということが意識付けされており、低学年は遅れないように必死でついて歩き、高学年やリーダーがそれを支える姿が出来上がっていた。また、周りの自然に目を向ける余裕も出てきており、自然の美しさに気が付く参加者も多かった。望岳台に到着後はそれぞれバーナーを使って昼食を自分たちで準備することも自然にできるようになった。

６時間を歩ききった自信も見え、次の日の富良野岳登山を成功させたいという言葉が聞こえた。

⑤ 「山を歩く（富良野岳登山　1,912m）」

５日目はこの事業のメインとなる富良野岳登山に挑んだ。朝７時45分より登山を開始した。30度の気温の中、互いに励ます声や、危険個所を伝える声が飛び交い、チームとしての登山を遂行することができた。生活リズムが整わず、途中、トイレに行く参加者も見られ、規則正しい排便の定着の必要性を改めて感じた。晴天の中、雄大な山の風景に感動する者も多く見られ、「また山に登りたい」「今度は違う山にも登ってみたい」などという感想が後日多く寄せられている。

登山後は達成感も大きく、また、ともに登りきったという仲間意識がさらに強まり、集団登山の持つ影響力の大きさを感じた。

⑥　「マイプラン」

６日目は班毎にこれまでの食事の時間等に話し合い、計画を立てたマイプランを実施した。このプログラムを楽しみにしている参加者も多く、自分たちが好きに計画して、そのとおりに過ごすということに魅力を感じていた。外でドッジボールやテニスをしたり、写真を撮ったり、おやつを作ったりクラフト体験をしたりと様々な計画を立て、時間通りに全てを実施した。仲間意識が高まっている中でのプログラムであったため、共に楽しむという気持ちが一致し、どの班も上手に楽しんでいた。「もっと時間が欲しかった」という声も多く聞かれた。

⑦　「森を歩く」

７日目は上川中部森林管理署の協力を得て、自分たちが過ごした森について学んだ。木の高さの測り方や、幹の太さを測る道具を使って実際に数値化し、計算式にあてはめ、計測した木の二酸化炭素の吸収量を算出した。また、天然林と人工林の違いについて学び人工林では木を育てるだけではなく、活用し、育てるというサイクルを組むことが人工林を育てることにつながるということも学んだ。学校の勉強では習わない貴重な学習の場となり、自然を大切にしようという気持ちを改めて確認した時間となった。

⑧　「マイセルフプラン」

「森を歩く」のプログラムの後に、雨のため屋内での実施となったが、時間にして、20 分程度でそれぞれが落ち着くと感じる場所にマットを敷き、自分のスペースを作り、そこでこのキャンプをふりかえる時間を設定した。参加者は黙って自分と向き合い、色々と思いを巡らせていた。

当初、時間を持て余すのではないかと心配していた３年生も 20 分間を一人で過ごすことができた。終了後に考えたていたことを記述させたところ、自分が頑張ったことや、家族への感謝の気持ち、これから頑張ってみたいことなど、一人一人が考えていたことが学年を問わず、しっかりと記述されていた。

「燻製作り」

災害時対応食の役割を果たす燻製作りに挑戦した。煙でいぶすことで色がつく様子に驚きを見せていた。他の物でもできないかなど、興味関心を持って取り組んでいた。

⑨ 「さよならパーティー」「キャンプファイヤー」

用意された食材から自分たちでパーティーメニューを考え、各班で創意工夫し、食事を作ることができた。また、パーティーの出し物も班ごとに短時間で決め、練習をし、堂々と披露していた。その完成度から、班毎のまとまりの強さを見ることができ、みんなで楽しむことができた。その後、場所を替え、スライドショーで活動の全てをふりかえった後、キャンプファイヤーを囲む形で一人一人が目標の達成度と、キャンプをとおしてできるようになったこと、今後に生かしたいことについて発表した。最後にリーダーからスタッフに感謝の言葉が述べられると、感極まって涙を流す参加者が相次いだ。「心を許せる仲間だからこそ泣くことができた」「みんなと別れたくなかった」など、仲間とのつながりを更に深める時間となった。

⑩ 「出発式」

マイセルフプランの時に自分でふりかえったことを、キャンプファイヤーの時に自分の言葉で発表し、出発式では自分の言葉を文章化し、改めて発表することができた。

9　参加者アンケートから

（1） 総合的満足度

・満足	１９	（９５％）
・やや満足	1	（5％）

（参加者の声）

〇勉強になった。

〇思い出がいっぱいできた。

●ちょっと疲れた

（２）　プログラム

・満足　　１８　　（９０％）

・やや満足　　２　　（１０％）

（参加者の声）

〇ハードだったけど、体力作りになった。

〇つらかったところもあったけど、楽しかった。

〇少しずつ距離を伸ばしていって山を登ることができた。

〇協力してプログラムを果たせて達成感がすごくあった。

●少し間をあけてやった方がいいと思う。

（３）　事業運営

・満足　　１７　　（８５％）

・やや満足　　３　　（１５％）

（参加者の声）

〇とてもわかりやすかった。

〇時間などがきっちりしていた。

〇わかりやすく一つ一つ確認しながらやってくれた

●寝る時間が遅れてしまった。（自己反省）

（４）　職員の対応はいかがでしたか

・満足　　１７　　（８５％）

・やや満足　　３　　（１５％）

（参加者の声）

〇説明がわかりやすかった。

〇しっかりほめてくれて、怒ってくれて叱ってくれた。

〇親しみがあってはなしやすかった。

〇助けてくれたり、優しくしてくれた。

１０　事業の成果

（１）　事業背景の達成度

昔の兄弟姉妹になぞらえて、小学３年生から中学生という幅広い年齢で作られた班は、毎日の寝食を共にするという生活の中で兄弟姉妹の疑似体験を生み出した。

リーダーとなった参加者は言うことを聞かない下の子の扱いに悩み、下の子は上の子に追いつくのに一生懸命となった。年が近いともめごとも多く、それを上の子がなだめ、ときには叱り、といったことが毎日繰り返される中で、上の子はリーダーらしく成長し、下の子は自分に負荷をかけることで身体的能力や、判断力等を伸

ばすことに成功している。互いの存在が、それぞれの学年に応じた違った能力を引き出す相互作用を担っており、これこそが昔の兄弟姉妹の関係の中での自らの生き方を学ぶということにつながっている。また、野外での自然体験はその能力を引き出すための環境であり、大きな役割を果たしていた。

（２）参加者の実際

今回中学生が２名と少なく、リーダーとしての役割を６年生２名が担うこととなり、いささか不安もあったが、班の異年齢の構成の中でリーダーとして動かなくてはいけないという意識が働き、活躍していた。このキャンプの核となるのは３年生の存在であり、３年生がいるから年上、年下という関係が明確になり、力の差も明らかになるからこそ学年の役割が明確になり、助け合ったり協力したり、それぞれを認め合う姿が生まれてくる。今回、小学３年生から中学生までそろった班は２つであったが、中学生のリーダーとしての変容ぶりは目を見張るものがあった。また、班としても安定感があった。６年生がリーダーの班については、中学生ほどの安定感はなかったものの、リーダーとしての自覚を持ち行動していた。６年生がリーダーの班は集団としての結束力が強く、互いにじゃれ合う姿など、スキンシップが多いという特徴が二つの班に共通して見られた。

（３）ボランティアについて

夏休みのボランティアは大学生のテストの時期と重なり、人数の確保が難しい状態が続いていた。今年度は、前年度のうちから幅広くボランティアを探して確保しようと考え、夏休み中に長期で対応できる人材としてボランティア経験のある学校教員に３月頃より声をかけ、３名（うち１名は臨時教員）を確保することができた。ボランティアから離れていた時期があるので、交流の家の３つの指導者養成事業に参加していただき、スキルを身に着けた上で参加していただいている。

今回のキャンプでは異年齢構成の班で兄弟姉妹を作るため、年上の子がリーダーとして育つことが大きなカギとなっていた。ボランティアはリーダーの相談役であると共に、時には遠くから見守るなど、リーダーとして１人立ちできるようにサポートしていく役割を担っていた。

教員としてのスキルを活かし、黒子役に徹したサポートはボランティア自身が際立つのではなく、リーダーをはじめ、班の子供たちが自分たちで考える道筋をつけることができた。また、ボランティアにとっても、子供たちと長期に渡ってすごす中で、学校現場では見ることのできない子供たちの姿から自分のスキルの向上にもつなげていくことができた。今後、学校教員のボランティアについて広めていくことが新たなボランティアの開拓につながり、ボランティア同士の学びにもつながっていくのではないかと考える。

（２） 記述式の評価

数値で出す評価のみではなく、様々な面から参加者の変容を捉えるために記述による評価を取入れた。ただ、書かせるのではなく、ねらいに沿って、また手順を追って記述させることで、参加者は思った以上に文章化し、書くことで気持ちを整理し、自分の考えにすることができていた。

１１　事業の課題

事業の要旨

今後の課題として晴天時と荒天時でのプログラムでは達成感の得られ方に大きく差が出てしまう。荒天時でも晴天時に劣らないようなプログラムを考案する必要がある。例えば、事前に明らかに荒天が予想される時は、バスで晴れている所まで移動してのプログラム実施を計画するなどダイナミックに発想を転換することも必要ではないかと考える。まずは荒天時プログラムの開発を課題の第一としてあげる。

二つ目の課題として、８月のこの時期は大学生のボランティアは試験と重なり募ることが困難となり、ここ数年、大学生のボランティア不足には頭を悩ませている。長期キャンプにおいては、ボランティアの抱える負担は精神的にも体力的にもかなり大きいことから参加を控える学生も多く見られる。今後、大学と連携して、このようなボランティア活動に参加することで学生自身が体験活動の経験値や指導場面のスキルを高めること、また、大学側には、社会教育に携わる人材を育成する場としての意義を伝えていく必要性を感じている。

そのためにも単位に置き換えられるような制度を確立していくなど、道内の社会教育に関連した大学や教授との連携を密にして、国立施設として先駆けて進めていきたいと考える。

三つ目の課題は、安全管理の徹底と考える。今回、活動敷地内にクマの出没情報が入り、避難経路の新設や、投光機の投入などの対応を取り安全配慮に努めた。一方で、期間中は北海道には珍しい気温 30 度越えが続き、食中毒警報も発令された。このことから、高温時の「食品の取り扱い」等、多様な状況に対応するために担当職員の研修が必要となる。

最後に、今回取り入れた記述式の評価により、参加者の変容がわかりやすくなったが、スタッフ側の時間確保が難しく、見過ごしてしまう部分も多々あった。今後、スタッフの記述時間の確保を、あらかじめ日程に組み込んでおく等の工夫でさらに評価を深めていくことができると考える。